

大陸科学院と農芸化学——川上行藏先生聞き語り——

どういふ関係で推薦されたのか知りませんが、私が大陸科学院に行ったのは、鈴木梅太郎先生より早いんです。昭和 10 年 8 月、先生と一緒に満州に視察にまいりまして、そのまま辞令をもらいまして科学院に入りました。ところが原っぱの真中で、建物もなんにもない、仕方がないので囑託の名目で、理研に残り、給料だけを満州からもらうという生活が 2 年ほど続きました。満州円のほうが相場が高くて日本円にとりかえると、30 円くらいもうかりました。それで皆に奢ることもできました。

昭和 12 年に建物ができて、鈴木先生に院長になっていただいて、私達も移りました。最初にさせられたのは、アルカリ地帯の、塩の研究を仰せつかりました。満州のアルカリ地帯というのは、現場に行ってみるとテニスコートのように地面をならしておくと、一晩で霜柱が立つようにきれいに塩の結晶が出ている。含塩量が 70~80% あって土塩といいます。また、蒙古地帯に行くとも過飽和食塩水の湖水があって、風が吹くと風下では自然に塩が析出されるんです。塩のあるところ必ず匪賊がおりまして、これを資金源にしていたので、当時の満州国としてはそれを追い払う意味もこめて研究を計画したようです。

各専門別の研究室の他に、鈴木先生には院長研究室が作られてあって、そこで自由に研究される体制でした。私が満州に行ってから先生に仰せつかった研究では、満州は大変乾燥する、それを利用してなにかできないか。先生のお考えでは、斜面に水を流したら蒸発する。それをガラス面に凝縮させ蒸溜水ができないか。雨が少なくて日が照るのだからやってみたらといわれて、やってみましたが、それはモノにはなりません。戦争になりま

すと、関東軍の仕事が多くなってきました。そのころ、大豆油がなくなってきたので、どこへ行ってしまうのかと探してみたらダイナマイトのグリセリンのために軍がもっていってしまうんです。そこで、グリセリンだけ差し上げるから脂肪酸はこっちにいただけないかという訳で、アルコールでグリセリンエステルを転換する仕事とか、やはり、軍が必要としたロッシェル塩マイクです。水晶を切ったマイクロフォンが一番いいんですが高いので、ロッシェル塩の素の酒石酸を作れということになり、満州には山葡萄が沢山あり、葉のなかから、酒石酸をとってカルシウム塩にして内地に送りました。内地でロッシェル塩にしたわけです。

鈴木先生の大陸科学院長としてのお仕事は当時満州にいろんな研究所があったんです。もっぱら満鉄所属の研究所でありましたが、それをできるだけ一本にして、大陸科学院にまとめることが先生のお仕事でした。先生は持病をお持ちで、皆が早く内地に帰られるようお勧めしたんですが、先生は、引き受けた以上、自分のことは自分で考えるとおっしゃられ、続けられたんです。やっと統合の目鼻がついて、昭和 16 年に引き上げて来られました。

先生の後には、第一代院長だった直木倫太郎という方が再度院長を引き継がれました。この方は土木の先生で非常な秀才でありました。30 歳代で大阪湾築港を完成された方です。その後、関東大震災があると、わずか 40 歳で帝都復興院総裁になられたという経歴の先生であります。この方が亡くなられて、第四代に満鉄総裁だった大村卓一先生が就任されました。ですから鈴木先生は二代目院長というわけです。

(文責 コラム編集部)